

8月1日

傷める葦・ほの暗き蠟燭
(イザヤ42:1-4)

見よ、我が支持するわが僕を、わが魂の喜ぶわが撰び人を。我は、わが霊を彼に与えた。

彼は諸々の国民に公義を齎す。彼は叫ばず、言挙げせず、その声を巷に聞えしめない。

傷める葦を折らず、ほの暗き蠟燭を消さない。

信実を以て公義を示す。彼は衰えず挫けないで公義を地に据えつける。津々浦々はその教法を待ち望もう。(イザヤ四二・一―四)

第二イザヤ書の要なる「エホバの僕」と謂われる詩の第一がこの四二・一―四である。ともあれ、エホバの僕は歴史的にはアブラハムから始まっている。彼は神の声に従って行動した信仰の元祖であったからである。神の僕は撰びの個人即撰びの一部族から発して民族そのものをも意味したりする。そういう霊的人格の融合性がある。特にその内実は当てはまる。此処に謂う「エホバの僕」はある特定の人物で、それはやがてナザレのイエスへの預言として受けとられることになる。

この僕は、義人であるから、義しい「審判」即ち公義を行ずる人である。しかも徒らに叫ばない謙虚な人である。弱者を深く顧る愛の人であることは「傷める葦を折らず、ほの暗き蠟燭を消さず」という言葉に於ていみじくも表現されている。そして彼の魂には、神の霊が特に与えられて、神と一如的な人となっている。正にキリストを思はしめる「エホバの僕」の第一歌ではないか。

8月2日

罪贖の霧散雲

(イザヤ43:44)

○ヤコブよ、汝を創造したエホバ、今こう言い給う、

イスラエルよ、汝を造った者今こう言い給う、

「恐れるな、我は汝を贖った、我は汝の名を呼んだ、汝はわが有である。」(イザヤ四三・二)

(イザヤ四三・二五)

○我こそは我自らの故に汝の不義を消し汝の罪を心に留めない」

○汝はわが僕。イスラエルよ、我は汝を忘れない。(イザヤ四四・二)

○我は汝の不義を雲の如くに消し、汝の罪を霧の如くに散らした。

汝われに回帰せよ、我れが汝を贖ったのだから。(イザヤ四四・二)

福音は現在に關はるから「今」といつているのに注目。その「今」に於て既に贖われている。だから何も恐れるに及ばない。神は私たち一人一人の名を呼んでおられる。「おまえは私の有だ」と本願の愛がつかんで下さる。神は、キリストは御自身の故に、私の罪過を消し、心に留め給はない。何たる圧倒的な愛ではないか。我々が「僕」とされるのは、こちら側の何の故でもない、恵みの撰びに由る。私の罪過は雲散霧消されている。これがキリストの十字架による贖罪のありがたさである。「エホバの僕」でありながら聖者や啓者の如きイスラエル(四二・一―二)を棄てないで救うエホバである。神に回帰できるのは既に贖われている恵みの力による。この贖罪の神に全托すれば、水火をも突破して往ける(四三・二)。

8月3日

隠れて在ます神

(イザヤ45:14下,15)

彼ら^{四下}あなたに平伏し、あなたに祈願して言う、「誠に神はあなたの中に在ます、神は他には無い。絶無だ。誠にあなたは隠れて在ます神で在り給う、イスラエルの神よ救主よ！」(イザヤ四五・一四下、一五)

ベルシャ王クロスは、イスラエルの神を畏れて、バビロン捕囚のイスラエルの民をエルサレムへ帰還させる役割を果たした。それは恰も仲保者的な役割であった。しかもエジプトもエテオピアもセバもクロスに敵し得ない状態であった。「彼ら」とはそういう諸国のことで、「汝」とはイスラエルのことである。神はイスラエルの中に在ます内在的に力となつて在り給う霊なる神であると彼らは告白している。目に見える偶像の神とはちがう。本当の神は人の間に、人の中に臨在している内在的な霊神で、他に神は無いのだと告白しているのは驚くべき認識である。第十五節の「汝」は勿論エホバなる神のことで、神は「隠れて在ます神」で見えざる実在者だ。それは超在し、遍在し、内在するところの、目には「隠れた神」でありながら、丁度大気が見えないけれども、上なる天に超在し、到るところに遍在貫在し、我らの体内に内在するが如くである。(エペソ四・六参照)。キリストも神のことを言い給うた「隠れたるに見給う汝の父」、「隠れたるに在ます汝の父」と(マタイ六・四、六)と。神は復活のキリストに於て最も「顕はれたる」神(deus revelatus)であつたが、それは同時に十字架のイエスに於て最も「隠れたる神」(deus absconditus)であつた。イエスの実存そのものが顕在即隠在の「顕き」であつたのである。

8月4日

私は荷い、私は救う。

(イザヤ46:4)

老年に至るまで私は変らぬ者である。白髪になるまで私は荷う。
私が造ったのだ、だから私は負い、私は荷い、私は救う。(イザヤ四六・

四)

この聖言の前に「ヤコブの家よ、イスラエルの家の遺れる者よ、腹を出てから私に負われ、胎を出てから私に抱げられた者よ、皆私に聴きなさい」(四六・三)という句があるように、ヤコブ・イスラエルの遺れる者への語りかけであるが、この節には相手の代名詞が一つも使われていないむしろふしぎな句であるので、我々への呼びかけとして読むことにしよう。

人の寿命は全く神の手の中にある。しかも神は必ずしも狭義の聖旨のままにはなさらないと思われる。所謂運命や環境や、人間界の罪過や諍いや妬みや、さまざまな要素によって人の生涯は左右されることが大いにある。常道や秩序に対して矛盾や錯誤や混乱が交錯しているドラマが個人の生涯でもあり、社会や国家の歴史である。これに如何に対処するかは人生の死活がある。またその歴史的ドラマを如何に神は照覧し、取りあつかい給うか、審判し給うかに歴史と人生の真義がある。

この聖句のように神に老年まで護られ、導かれ、救われる人は、課題と使命と責任と光栄を荷わせられ、着せられる。その人はそれらを神に帰し、御本願に荷われ、救われつつ、み力を賜り、神の栄光を目的として生きなければ本当に生きることにならない。そのためには是非とも聖霊を賜りこれを力とすることを要する。

8月5日

神の栄光の宗教

(イザヤ48)

わが名^なの故^{ゆゑ}に我は怒^{おこ}りを遅^{おそ}くし、わが名^な譽^{ほまれ}のゆゑに汝をしのびて汝を滅^ほぼさなかつた。

見よ、我は汝を鍛錬したそれは白銀^{しろがね}によつてではなく、艱難の爐で汝を試煉した。

我はわがため、己^{おの}れのためにこれを成す、どうして我はわが名を汚させようや、我はわが栄光を他の者には与えない。(イザヤ四八・九一二)

聖書の宗教は幸福主義ではない。御利益宗教ではない。安心立命、家内安全、事業繁栄、国運隆盛といった現世的幸福を祈願する宗教ではない。

神中心であつて、神意成就が主眼である宗教である。神が主体であつて、人は客体である。神が主であつて人は僕である。神意を體現するのが目的である。そのためには献身する実存である。

神意に信従し、神意を體現することが義なのである。神は義の神であるから、不信不義罪過に対しては審判を以て臨むけれども、他面憐み深い神であるから、怒りをのぼして、人が、民が、神に立ち帰ることを、回帰することを忍び待ち給う。回帰すれば、大乗的にゆるし給う。神との関係を正しく持つために、人を鍛錬し給う。艱難が来たら神の試煉と受けとる。イスラエル民族はしかし不信のために遂に神の怒りを蒙り、北イスラエル、南ユダの両国は滅びた。併しこの審判のあとに恩恵が待っていた。国は滅びても民は滅びない。深く愛惜され、顧みられた。その消息の焦点が「エホバの僕」のおとづれである。

8月5日

(詩) 第二イザヤの福音 (イザヤ40—48)

作詩：1982.8.28

歌調：S. 530 「うき世の嘆きも」

第二イザヤの福音

1 イスラエル・ユダの 罪はゆるされ

バビロンを出でて 帰りし如く、

我らも出我し み許に來たり

十字架・聖靈の 道につきけり。

2 宇宙を創造れる み神の眼には

諸々の民は 無きにもひとし、

あらがふ国々 塵にも似たり、

み神の靈知は 測りも知れず。

3 汝ら知らずや 耳にもせぬか、

み神はみ空ゆ 見おろし給ひ

地に住む者らを 蝗とぞ見る。

涯なきみ空は 神の幕屋ぞ。

4 み靈のみ神は 力の源ぞ

依り頼む者に 力を賜ふ、

晨に夕に いそしみたれど、

み力臨みて つかれを知らず。

5 「まことに我こそ 自らのゆえ

汝れらの罪過を 心に止めず

汝れらの罪過は 雲散霧消！

わが愛わが義を 与へて尽きず！

6 我は汝らを あがなへる神、

汝れらはわが有 名を与へたり。

水中を渡るも 溺れず水に

火中を往くとも 燃ゆることなし。

7 キリストの僕 撰びの群よ、

預言者・使徒らの 道を受け継ぎ、

聖靈の幕屋を 張りける僕、

み靈の火となり 突き進めかし。

8 選びのみ民よ み靈の群よ、

汝れらは誰しも 愛の人たれ、

傷める蘆をば 直く立たしめ

8月5日

(詩) 第二イザヤの福音 (イザヤ40—48)

作詩：1982.8.28

歌調：S. 530「うき世の嘆きも」

小暗き灯火^{ともしび} 燃え立たしむる。」

全地は地獄^{ゲヘナ}に 変貌すべし！」

9

エホバのみ神は み民のうちに
み霊の主として 隠れて在ます
うつせ身われらにキリスト・イエスは
隠り身となりて はたらき給ふ。

10

「救をほどこす 我は義の神
胎を出でしより 汝を負へり
年齢^{よふい}の果てまで 荷ひて救はん
使命のかぎりを 貫き果たせ！

11

我こそ今しも 汝に示さん
未だ告げさりし 世界の秘事を
わが名のゆえにぞ 怒りを抑へ
審判の時期^{とき}をば 忍びに忍ぶ

12

われこそ歴史の 元始^{アルハ}と終末^{オメガ}
世界は今こそ 回帰^{カクストロイフ}せざれば
前代未聞の悲劇^{カクストロイフ}的終末！

8月6日

わが僕イスラエル
「エホバの僕」第二歌
(イザヤ49: 1-7)

津々浦々よ我に聴け、諸々の民よ遠方より耳傾けよ。

エホバは胎より私を召し、母の腹よりわが名を称えた。

彼は私に告げた、汝はわが僕、イスラエル！

汝が中にわが栄光は顯はされるのだ、と。

彼言ひ給う、汝はわが僕、我は汝を諸々の国民の光とし、わが救済

を地の極まで及ばしめる者とする。

エホバ、イスラエルを贖う者、その聖者は、侮られる魂、民に嫌わ

れる者、君侯たちに使役される者たるエホバの僕にこう言ひ給う、

諸王は見て立ちあがり、君侯たちは拝跪する、これ信実あるエホバ、

イスラエルの聖者、汝を選び給うた者のゆえである。

これが「エホバの僕」第二歌である。第三節に注目、即ちエホバの僕は同時に全イスラエルの融合的代表者で、これを復合的人格と称う。

日蓮が日本の柱と自覚したように。今日は広島原爆記念の日、「広島」といえば世界平和と悲願の代名詞であるのと同軌である。「エホバの僕」十字架のキリストこそは、人類に対し、心の原爆を棄てよ！ との本願の叫びそのものである。

8月7日

神の義と救
(イザヤ46……51)

○^三我に聴け、心頑^{かたく}なにして義より遠き者よ。

我はわが義を近づかしめる。わが救は遠くないから待たせない。

我はシオンに救を、イスラエルにわが栄光を与えよう。

(イザヤ四六・一二、一三)

○我に聴け、ヤコブよ、わが召したるイスラ

エルよ、我は是れだ。

(イザヤ四八・一二)

即ち我は始めであり、寔に我は終りである。

○婦人その乳兒を忘れ、おのが胎兒を憐れま

ないことがあるか。

(イザヤ四九・一五)

假令彼女ら忘れるとも、我は汝を忘れない。

○汝ら目を挙げて天を仰ぎ、下なる地を觀よ、

天は烟の如く消え、地は衣の如く朽ち、

その中に住む者は^{おぼ}の如く死に果てる。

されどわが救は永遠にながらえ、

わが義は破れ去らない。

(イザヤ五一・六)

これらの聖句は第二イザヤ書の特色を表はしている。○神の義は審判の義であると同時に、神の義を慕って回帰しゆく者には、その義を与え給う救となる。故に義と救が同義語的に用いられる。

○神は歴史の、また個人の生涯にとつて、創造の始と、救済の終をもつ。

○神は我々個人の存在を深い愛を以て顧み給う。

○天地は過ぎ往き、住者はみな死ぬ。しかし神の救は永遠であるから死者を復活させる。それが神の義である、愛である。

○神は我々個人の存在を深い愛を以て顧み給う。

8月8日

朝な朝な門弟らしく
「エホバの僕」第三歌
(イザヤ50:4-9)

主エホバは門弟たる者の舌を私に与え、
言を以て疲れた者を扶助^{たす}けることを教え、
朝な朝なわが耳を醒^{さます}し門弟らしく聴かしめる。
私は鞭^{むち}つ者にわが背をまかせ、
鬚^{ひげ}を抜く者に頬^ほをまかせ、
恥辱^{はじ}と唾^{つば}を避^さけんとて顔を隠^{かく}しもしない。
主エホバ私を助け給う私は辱^{はづかしめ}られぬ。
この故に顔を燧^{ひょう}石^{いし}の如くして侮辱^{はづかしめ}なきを知る。
私を義とする者近きにある、誰か私と争^{あらそ}い
得よう。
見よ、主エホバ私を助け給う、誰か私を罪
し得ん。

(イザヤ五〇・四―九)

このイザヤ五〇・四―九は「エホバの僕」の第三歌とされている。
この第二イザヤなる預言者は神エホバの直弟子と見て可い。パウロがキリストのみ霊による直弟子であった如くに。私が「門弟」と訳した字義は「教へられた者」である。
迫害されたイエスを連想させるような迫害に第二イザヤ自身が出遭^{であ}つたと見る無抵抗で毅然^{げんかん}たる相^{すがた}が目に見えよう。
神霊に在^あつて、天来の力を受けると、そういう底力のある勇氣が全身にこもる。人生は神・キリストのみ霊の力を体受^{ていじう}してこそ万難を突破し得る。パウロがその最たる身証者であつた。

8月9日

未見未知の靈止

「エホバの僕」第四歌（其一）

（イザヤ52：13—53：2）

見よ、わが僕奥義を行じ、
 挙げられ、高められ、いと高くなる。
 多くの者汝に驚異した如く、——
 そは、その面影害われて人ばなれし、
 その容姿人の子らからも外れていたので
 その如く彼は多くの国民を驚嘆せしめ、
 諸々の王は彼ゆえにその口を緘む。
 そは彼ら未だ語られなかったことを見、
 未だ聞かなかったことを悟ったから。
 誰が信じたか、我らの聞きしことを。
 エホバの腕は誰に現れたのか。
 彼はみ前に芽生えの如く、
 乾ける地からの根株の如く生い立った。
 彼には容姿なく、見るべき端麗さなく、
 我らが慕うべき見栄えもない。

今日は長崎原爆記念の日だが、
 いよいよ最深最高の「エホバの僕」第四歌にさしかかった。これは全イザヤ書六十六章の心臓部であり、旧約聖書の絶頂であり、新約聖書とその福音書の焦点たる十字架のキリストへの預言である。
 北イスラエル国がアッシリアに紀前七二一年に亡ぼされ、南ユダ国がバビロニアに五八七年に亡ぼされ、五三八年までバビロン捕囚半世紀の隷属を嘗め、エルサレム帰還とはなったが、その中に無名の大預言者（第二イザヤ）がいたと思われる。彼はある空前の人物の靈姿を神に示された。それは民衆も王者も驚異する人。一切の苦難と罪過、血涙と悲慘を一身に負っているような、相の靈止であった。

8月10日

かなしみ にないて
悲痛の荷手

「エホバの僕」第4歌（其二）

（イザヤ53：3-6）

彼は蔑すまれ、人々に棄てられ、
苦患を知る悲痛の人であった。
ひとは顔を隠して彼を卑しめたが、
我らも彼を意に介けなかった。
まことに彼は我らの苦患を荷い、
我らの悲痛を負っていたのに、
我らは彼をこう見なした、
神に打たれ苦しめられているのだと。
否、彼は我らの不義の為に刺し貫かれ、
我らの罪のために碎かれたのだ。
彼に対する懲罰は我らの平安となり、
傷痕だらけの彼によって我らは治癒された。
我らは皆羊の如く迷いゆき、
各々その路に向った。
然るに神は彼の中にぶち込んだ
我らすべての罪を！

（イザヤ五三・三一六）

「エホバの僕」第四歌の中でも、この第四―第六節が最も中心部で、キリスト・イエス御自身が魂の奥底にこれを銘記しておられたにちがいない。この預言のまま身証し給うた。「苦患」は具体的な苦痛、病患を意味するが、内面的には苦悩である。「悲痛」も具体的な悲歎、痛恨であるが、内面的には悲哀、悲涙である。「知る」とは全存在で体験し体認することである。彼は世界苦を一身で負っている人である。世の末までも！キリストの十字架は、我らの不義と罪のために「碎かれた」と私は受けとったので、「碎けの神学」を告白したのであった。

8月11日

エホバの
神の羔

「エホバの僕」第四歌（其三）
（イザヤ53：7-10上）

彼は迫害されたが耐え忍び、
しかもその口を開かなかった。
屠場に索かれる羔の如く、
毛を剪る者の前の雌羊の如く、
彼は黙してその口を開かなかった。
彼は虐待と断罪によって取り去られた。
だが誰が慮ったか彼の命運を！
彼が生者の地から断たれ
わが民の罪過の為に打ち殺されたとは。
彼の墓場は悪人と共に設けられ、
彼の死に当っては富者と共に。
彼は乱暴をはたらかず、
その口に虚偽はなかったのに。
神は彼を砕くことを欲い、
彼を刺したのである。

東西いづれの国でも権力者が善良な庶民を抑圧するので、庶民は塗炭の苦しみを嘗め、血と涙の中にこの世を去った人々が無数にいる。この霊人は、それを体験して、人々の苦しみをどん底で荷うことの出来た人である。罪のなやみも艱難から来る苦しみも、一身で荷い、助力と贖罪を果し得た人は、この預言を体現したナザレのイエスのみであった。そのキリストを無視してこの「エホバの僕」の預言を空しくしているのが、ユダヤ教信奉のユダヤ人である。噫！「悪人」も「富者」もこの世の人の中でも神に叛いて権勢や財力に与した者どもである。この義人の「墓場」がそんな連中と一緒であるとは何たることか。しかしそこに贖罪の愛の相がある。「羔」というふしぎな表現は正に神の羔たるキリストへの暗号である。

8月12日

どん底の執り成し
「エホバの僕」第四歌（其四）
（イザヤ53：10下—12）

もし彼がその生魂を罪の犠牲に供したとするなら、彼はその後裔の末永き日を見、神の法悦は彼の手にて満たされたわけだ。彼はおのが煩勞を見て心足りた。わが義しき僕はその知によって多くの者を義とし、彼らの不義を彼は荷つてゐる。この故に我は多くの者を彼の分前とし夥しい獲物を頒ち取らしめる。そは彼れおのが生魂を注ぎ尽して死を招き、不義なる者の數に入れられたが故に。げに彼は多くの人の罪を負い、不義なる者たちのため執り成しを果した。

（イザヤ五三・一〇下—一二）

このイザヤ書53章は正にキリストの十字架の贖罪死を預言した驚くべき文字である。そしてイザヤ書35章は終末的天国の素晴らしい預言である。而もキリストは地上でこの35章を体現したあとで53章の預言を十字架で成就し給うた。我々罪びとは53章の贖罪を信受すると、35章の聖霊のゆたかな現実を賜る。謂はば、35が十字架のキリストと聖霊のキリストを表はすことになる。ふしぎな数字ではないか！

8月13日

夫なる神^{エホバ}と妻なるイスラエル
(イザヤ54:1, 4, 5, 10)

五二 飲べ、孕まざる石女^{うまずめ}よ。

高唱^{ひやう}歡呼せよ、産の苦しみ無き者よ。

げに独身^{ひとりみ}の子らは

嫁^{よめ}げる者の子らより多い、と神^{エホバ}言う。

恐^{おそ}れるな、汝辱^{はづか}しめられじ、

惶^{おそ}てるな、汝赤恥^{せきち}を受けじ。

汝若^{わか}き日の恥^{はじ}を忘れよ、

汝^なが寡女^{やめ}時の恥辱^{はじ}を最早憶^{おも}はざれ。

そは汝^なが主人^{あるじ}は汝^なが造り主、

その名は万軍のエホバ、

汝^なが贖主^{あがなひ}はイスラエルの聖者^{しやう}、

全地の神と謂^いわれるお方。

山々は移り諸々の岡は動くとも、

わが愛は汝より移らず、

わが平安の契約^{あひだ}は不動、

とは汝^なを憐^{あは}む神の言。

神エホバと妻イスラエル民族と
いう関係を憐憫たる結婚生活その
ものを通して預言させられたのは
ホセアであつたが、エルサレムは
荒廃し、バビロンの捕囚の憂き目
を嘗めさせられた「石女」の如く、
「寡婦」の如き選民、その昔はエ
ジプトの奴隷生活を送つた若き日
をもつヨセフの族、こういつたイ
スラエル民族を妻として新たに顧
み、いよいよ深く愛し、永遠不
動（第十節）と神は確言してい
る。

翻つて女性の生涯を思う。石女
の女性、寡婦の女性、独身の女性、
いづれの女性も第二の国民の貴い
母である。キリストに愛されて、
幼児の、青少年の霊的な愛の母と
しての使命を夫々の生活を通して
全うせられよ！ 合掌

8月14日

永遠の契約
(イザヤ55:1-5)

噫、渴ける者は皆水に^こ来よ、銀錢^{かね}なき者も来よ、来て穀物を買つて食^なべよ、然り穀物を銀錢^{かね}なしに、値なしに葡萄酒と乳とを買え。何故糧食^{なげパン}でないものに銀錢^{かね}を量^{はか}り、腹^{はら}ごたえなきものに労力を費すのか。我に心して聴^きけ、かくて好きものを食^くべよ、汝らの生魂^{いのち}は脂^{あぶら}で飽^あき足りよう。

汝らの耳を傾けてわが許に来よ。よく聴^きけ、汝らの生魂^{いのち}は活きる。我は汝らと永遠の契約を、ダビデへの信実^{ちぎ}なる愛を契^{ちぎ}る。

(イザヤ五五・一一三)

これらの言はすべて神^{かみ}の言である。国破れて半世紀を経たエルサレム・シオンであるが、神殿なく王者ないベルシヤの属領となつてゐる惨めなエルサレム・シオンである。

我々はしかしこれらの聖言を我々への啓示として今受けとろう。経済大国と言はれてゐる日本人は、実は魂が「渴ける者」である。神が与えようとしている「水」とは何か。これは金銀では買えない聖霊である。キリストがサマリヤの女に与えようとした「水」である(ヨハネ第四章)。キリストはおのが血と肉を葡萄酒とパンに於え象徴して、我が血を飲め、わが肉を喰えと言つた。オリウの油も聖霊の徴である。要するにキリストという「好きものを食べる」と我らの生魂^{いのち}は活きる。これがキリストが与え給う「永遠の契約」たる永遠の生命である。この「信実なる愛」の契りを信受、体受せんのみ。

8月15日

天道地路

(イザヤ55：6-13)

六
汝^{エホバ}ら神の見出され得る間に彼を尋ねよ。近くに居給う間に彼に呼ばはれ。

悪しき者はその路を棄て、虚しき人はその思念を棄てて神に帰れ。さらば彼は憫み給はん、我らの神に帰れよ。彼は豊かに赦し給う。げにわが靈想は汝らが思念と異なり、わが道は汝らの路と異なる。天の地より高きが如くわが道は汝らの路より高い、わが靈想は汝らの思念よりも高い、と神言い給う。

(イザヤ五五・六―九)

神を発見し得る期間は定かではないといつて可いが、青年時代が最も大切である。情念が純真熱烈であるから。神は理念でも観念でもない。極めて具体的実存的である。天然の中に神の栄光が現はれている。人間界の中に神の相が映っている、幼児乳児の相に、純情の乙女の姿に。憐み深き人の顔に。併し全存在として顯然と神を体現した唯一の人があった。「我を見し者は父を見しなり」と告白したナザレのイエスである。

福音書を読んでそのイエスの言行に接して降参したときに神が発見される。イエスの天道は我らの地路とはちがう。彼の言の靈的な權威、彼の行為のけたがいな次元。それはこの第二イザヤへの神の聖言の通りだ。キリスト・イエスに接してはじめて、イザヤ書の聖言の現実を見るのである。然らば我らは生來の地路を棄てて、キリストに帰入し、御靈の力と知慧により天道に即した地路を歩まん哉。

8月15日

(詩) エホバの僕 (イザヤ49-55)
(エベド=ヤハウエー) 作詞: 1982.11.5
歌調: S. 359 「夕陽はかくれて」

エホバの僕

1 主なるキリストは 選びの民の

救主なれど 彼らは受けず

さはあれキリスト 世の終末まで

彼らの帰るを 祈り待ち給ふ

2 「ああイスラエルよ 選びの民よ!

母親情れなく その乳児を

忘るるあるとも 我は忘れじ

永遠の愛に 抱かれざるや」

3 主は侮られて 人に棄てられ

苦患を知り給ふ 悲哀の人!

しかるに我らは 神に打たれて

苦しめられたる 人と思へり。

4 苦しみを忍び 口を開かず

屠場に向ふ 羔の如

我らの罪をば 荷ひて独り

十字架の上にて 碎かれ給ふ

5 復活の主は パウロを選び

聖霊の器に 饒へらしめ

異邦人への 栄光となして

世界にあまねく 道を伝へり

6 「わが義は来たれり 我は救ぞ

この義を受くれば 救はれてあり

贖はれし者 讃歌を謳へよ

汝れらが胸には 歎き絶えじ」

7 み母の胎より 生れにし時ゆ

み神に護られ 育くまれたり

聖言聖霊は わが生命なり

イエス・キリストの 無者たる僕

8 「わが愛の幕屋 大胆なれよ

エホバの僕よ 時期は迫れり

身証の伝道 地道になして

8月15日

(詩) エホバの僕 (イザヤ49-55)
(エベド=ヤハウエー) 作詞: 1982.11.5
歌調: S. 359 「夕陽はかくれて」

幕屋を拡めて 綱を延ばせよ」

いづれの人をも 迎へ抱けよ!」

9

実存主^{エホバ}をたづねよ 日の暮れぬ間に
近くに居給う 主を求めよや
とやかく思はで イエスに帰れ!
み腕を拡げて 抱き給ふぞ

10

日の本の人よ 聖書^みに來たれ
神のドラマたる 現実^{うつつ}の中に!
キリストの力 われらに迫り
思はず叫ばん ハレルヤ・アーメン

11

「渴ける人々 來たりて飲めよ
永遠の水を われは与へん
我は聖靈の バプテスマせん
飲び尽きせぬ 生命に溢れん。

12

わがエクレシヤよ 使徒らの如く
我れに立ち帰り 一如となりて
いづこも聖国の 現実^{うつつ}となして

8月16日

神に迎えらるる人
(イザヤ57:1, 2)

義しい人が歿し去るとも心にとめる人なく、
愛の人々が取り去られても顧る人がない。

げにや義人は悪の面前から取り去られた。

(だが)彼は平安に入る、彼らは安息の場で休らう、

誰でも真直ぐ歩いた者は。

(イザヤ五七・一、二)

地味に地道に正直に暮らしていった義しい人が世の中にはいる。大方馬鹿を見たり、損をしたりしている。しかしそんなことを意に介しない。自分の仕事、それも社会的には目立たない。彼は手仕事人であるか、ある団体の下部で働いている人か。要するに小市民である、または田舎の村人の一人である。自分の仕事、持場を真面目に尽している人である。或はまた愛の深い女性で、いつも下積みで人のために働き、身体の弱い人、貧しい人のために自分の衣食も顧みないで尽している人である。

さきの義人は悪者に出遭って(「悪の面前から」という表現)存在を消されてしまった。このような義しい人も愛の人も、世を去ったが「心にとめる人がいない」「顧る人がいない」知名の人たち、社会的に権勢のある人たち、財力のある人たちには大げさな葬式が営まれる。何と世の中には虚しいことが多いか。

原文には「だが」はない。沈黙の無音の「だが」である。彼は神に迎えられて平安に入る。彼女らは天界のオアシス(縁蔭水辺の場)で安息する。地上で義を愛を貫いた人々は、天界で神のパラダイスに迎え入れられる。これが本当の平安であり神讃美である。

8月17日

天地の抱擁

(イザヤ57:15)

高く崇高^{けだか}く永遠に住み給う者、その名聖者なる者が、げに斯^{一五}く言い給う、「我は高き処、聖き処に住む、また我は碎けたる者、靈の貧しい者と偕に住み、貧しき者の靈を活き返らしめ、碎けたる者の心を活き返らしめる。」

(イザヤ五七・一五)

イザヤ書五六―六六を学問的には第三イザヤ書と称う。第一イザヤ書は一―三九で、第二イザヤ書に於てその精神は継がれ、且つその民族性が世界性へと突きぬけている。第三イザヤは第二イザヤの精神を継ぎ且つ展開して更に終末論的で新約の黙示録に投影している。第一イザヤは信仰の面が強いが、第二イザヤは正に愛の面が深い。そして第三イザヤは希望の面が優っていると言える。イザヤ書全六十六章は全聖書六十六巻と数を同じうし、内容が信、愛、望というパウロの福音神学の根本構造を有ち、キリストの福音を雄渾、深刻、壮美にうち出し預言しているわけで、正に旧約、新約の縮図の如き預言書である。

ここに掲げた五七・一五は福音的な黄金文字である。神は靈的空間の至高、至聖なる処に住み給う。その神が光の如く降って碎けた魂の者、どん底にいる惨めな者、靈の貧しい、自分を何者とも思はない無者と偕に住み給う。

天国と地獄の抱擁、接吻をして下さるのがこの聖なる神である。しかもその貧しい靈、碎けた心に復活の力、永遠の生命を与え給う。これ以上の消息があるか！

8月18日

「わが嘉する断食」
(イザヤ58：6-9上)

「わが嘉する断食は、此の如きではないか。惡の縄目をほどき、
軛の結び目を解き、押えつけられた者を自由にしてやり、すべての
軛をへし折ってやること。」
(イザヤ58：6-9上)

また飢えた者に汝のパンを割いてやり、貧しき旅人を汝が家に宿
し、裸身の者を見たら衣せてやり、汝が同胞から身を隠さぬこと。」
さらば汝が光曙の如く破れ出で、汝が治癒は速かに萌え出で、汝
が義は汝に先立ちて往き、エホバの栄光は汝が後を照さん。

汝呼べば神応え給い、汝叫べば彼言はん、「我此処に在り」と。

預言者の宗教は祭司のそれとは異なり、人間としての実存を問題としている。実存の第
一は神との縦の關係で神意に従って僕として実存することである。第二は人との横の關係
である。それが上掲の事態である。即ち「わが嘉する断食」という命題を以て。いろいろ
迫害されている者を自由にしてやること、衣、食、住に困っている旅人や弱者や貧者を心
から具体的に助けてやること、開放的な心根で同胞を惜しみなく受け入れること等が、本
当の断食だという。そうすると、我々は光の人となり、病があれば癒されるし、人を癒す
力も与えられる。神意に従うその義が道案内をし、神の栄光が後から照らして下さる。
神を呼べば応えて下さる。我々は神に帰入して力を賜り、人へ転出して人を助ける。これ
がまことの断食である。

8月19日

安息日に神を楽しむ

(イザヤ58:13, 14上)

「若し安息日、わが聖日におのれを楽しませる業から汝が汝が足を転ずるなら、安息日を称えて歡喜の日となし、神の聖に尊厳を帰し、これを尊びておのが道を行ぜず、おのが好む業をなさず、おのが言を語らないなら、その時汝は神を楽しむことになる。」

(イザヤ五八・一三、一四上)

第三イザヤの時には、第二神殿が出来あがっていた。第二神殿は紀前五一五年に完成した。であるから、神殿における礼拝が始まった。それ以来をユダヤ教時代という。

それで上掲の如き神の宣託があった。これがモーセの十言の第四、「安息日を憶えてこれを聖とせよ」の精神である。

我々のはキリスト道における安息日で、ユダヤ教の場合とはちがうが、精神は同じである。キリスト復活の晨を憶え、キリストの復活の生命に与かるのがキリスト者の安息日である。個人の体験を聖名のゆえに語らせていただくと思えば、私は十九歳の頃入信して以来、八十余歳の今日まで、安息日を正直遵って来た。学生時代、翌日が試験日でも、安息日には聖書を読んだ。自分で独立の集会を始めたのが一九四〇年の秋九月二十二日、舎兄政美召天の日を記念して開始したが、これは必ずや地上を去るまで続けるであろう。我々同志は聖書というドラマの中に読み入って、キリストのみ霊のみ力にあづかり、「キリストを楽しむ」の主体とさせていたといっている。ハレルヤ！

8月20日

神の^{かつちゆう}甲冑、契約の靈言
(イザヤ59:16, 17, 21)

彼れ人なきを見、仲保者なきを奇異み給い、おのが臂を以て自ら

を助け、おのが義を以て自らを支え給うた。

彼は義をまとうて鎧となし、救の兜を頭にいただき、復讐の法衣

を衣とまとい、妬みを羽織って柄箱となした。

「これは彼らと結ぶわが契約である」と神宣う、「汝が上に臨める

わが靈と汝が口に入れたるわが諸々の言は、汝が口、汝が裔の口、

汝が裔の裔の口から、今より後永遠に至るまで離れることはない。」

(イザヤ五九・一六、一七、二一)

神は単独、孤独で在り給う、唯一神なるが故に。神はそのような絶対者でありながら、
相対的存在面を有ち給う、愛なる神であるから。その相対者に仲保者が隠れておられる。

旧約の神は単独でおのが義を貫く。しかしそれは反面に愛を隠している。神の甲冑の表現
がおもしろい。義の神意を犯した者には復讐をする。神の愛する者を奪うサタンの者に
対しては妬みの愛が燃えるのである。(以上五九・一六、一七)

神の靈は神の言と不可分的である。「わが言は靈なり生命なり」とキリストが言った通
りである。第三イザヤへのこの啓示の一節(五九・二一)は極めて重要である。ヨエルの聖
靈の預言と共にこの靈言の預言は忘れてはならない。神の靈、神の言は同時に作用力と行
動力をもっている。そこが人間の思想とは次元が異うのである。

8月21日

神の光を浴びて

(イザヤ60: 1, 15, 16, 19, 20)

起きよ、輝け、汝に光が臨んだ、
 神の栄光が汝の上に照り出でた。
 我汝を永遠の栄華、世々の歡喜に作り成す。
 汝諸民の乳を、諸王妃の乳房を吸って
 我れ神、汝が救主、汝が贖主、
 ヤコブの全能者たるを汝は知ろう。
 太陽は最早汝がため日中の光とならず、
 月華の皓も汝がため光とならず、
 神こそ汝がため永遠の光となり、
 汝が神は汝が壮美となろう。
 汝が太陽は最早沈むことなく、
 汝が月華は陰ることなし、
 そは神汝がため永遠の光となり、
 汝が悲歎の日は終るからである。

(イザヤ六〇・一、一五、一六、一九、二〇)

亡国のイスラエル・ユダ
 にとつてエルサレム・シオ
 ンは新しき都、神の都とな
 った。預言者第三イザ
 ヤにとつては現実の希望で
 あると同時に終末的な神の
 都への預言となった。
 誰が太陽なき昼間を、月
 華なき夜中を考え得よう。
 神が永遠の光で、神が太陽、
 月華たる靈光である。これ
 は歴史の終末に到来する神
 の都を預言した新約の黙示
 録に投影している。(黙二
 一・二三)。
 そして上掲の第十六節は
 奇異な表現であるが、創造
 の傑作女性の乳房が神の恩
 恵の生命的象徴とは美しい
 哉(イザヤ四九・二三参
 照)。

8月22日

神靈臨みて福音を

(イザヤ61:1, 3)

主、神の靈が私に臨んだ。これは神が私に油を灑ぎ、貧者に福音させるためであった。げに彼は私を遣はして、心の破れた者を繕い、捕囚人に自由を告げ、捕縛者に解放を告げしめ給うた。また神の愛恵の年と我らの神の義報の日を告げさせ、すべて悲しむ者を慰めしめ給うた。

またシオンの悲しむ者を喜ばせ、灰に替えて飾の冠を与えさせ給うた。悲歎に代えて歡喜の油を、不安の氣分に替えて讚美の衣を。かくて彼らは義の櫟の木々、神の植えた栄光となった。(イザヤ六一・一二)

イスラエル民族は蹟いても倒れても、神に立ち帰ることをたましいの相として現れてはならないか。民の不信の波に逆って神信頼の帆を掲げて赫進した預言者の船が相繼いで現はれた。この第三イザヤはその著しい船の一つであった。

このイザヤ書六一・一二は素晴らしい福音である。神の靈が降臨することを油が灑れたという。メシヤとは「油灑がれたる者」の謂いである。ギリシャ語のクリストスである。我々は即ちクリストの十字架の贖罪の現実を体受すると、聖靈が臨んでくる。かくて始めて本当のクリスト者（油灑がれたる者）となる。そのとき、このイザヤ書の預言が我々にも現実として体験し、また体現できるようになる。聖靈は力ある愛の霊であるからである。基督者が「福音する」とは、十字架・聖靈の福音を体現体与することである。

8月23日

神に在^{アホバ}っての喜び楽しみ

(イザヤ61:10, 62:1)

六二^{アホバ} 私は神に在^{アホバ}って大いに喜び、わが魂はわが神に在^{アホバ}って楽しむ。げにや彼、私に救の衣を着せ、義の外衣^{ウエガ}をまとわせて、新郎^{にいむこ}が飾り冠^{かんむり}をいただき、花嫁^{はなよめ}が玉飾の晴衣^{はれぎ}を装^{よそお}う如くなし給う。
シオンのために私は沈黙^{しだ}さず、エルサレムのために私は休安^{やす}まな
い、シオンの義、朝日の如く照り出で、エルサレムの救火^{たいまつ}の如く燃えるまでは。
(イザヤ61:10, 62:1)

シオン・エルサレムは今や新しき神の都であり、慘澹たる過去は悪夢の如く消え去り、新郎に迎えられる花嫁の如き心地である。預言者に示されている神の都は、ベルシャの属領^{アホバ}といった現世の政治的次元を越えた宗教的次元である。

神の与^{アホバ}え給うシオンの義とエルサレムの救とは同義語である。第二イザヤに於ての如く(イザヤ五一・五、六、八参照)。神と民との信愛関係の貫いている事態が義であるから、救がそこにある。それ故、これが成就するまで預言者は沈黙せず、休安することはない。

第三イザヤ自身がシオン・エルサレムとなつて、神に在^{アホバ}って喜び楽しんでゐる。「神に在^{アホバ}って」という現実^{アホバ}は観念でない。パウロが「キリストに在^{アホバ}って」(エン・クリスト)とよく言っているように。み霊に在^{アホバ}って信仰が信交であるとき喜び楽しみが生ずる。新郎と花嫁の関係の如くである。だから「新郎の花嫁を喜ぶ如く、汝の神汝を喜び給はん」(六二・五)といっている。花婿キリストに喜ばれる花嫁エクレシヤ(教会、幕屋、召団)である。

8月24日

我は独り^{きかぶね}で酒槽を踏んだ
(イザヤ63:1-6)

「なぜあなたの服飾^{よそおい}は赤く、あなたの衣は酒槽^{きかぶね}を踏む者と同じなの^ニのか」

「我は独り^ニで酒槽を踏んだ。……」

我は見廻^ミはしたが、助け手^テがなく、我はあやしんだが支え手^ツは竟になかった。そこでわが臂^{かひ}は我を助け、わが憤りは我を支えた。

(イザヤ六三・二、三、五)

イザヤ書六三・一―六を見ると、エドムの都ボヅラを審判の中心とした記事である。エサウとヤコブの兄弟争いの歴史をもつエサウの後裔エドム族とヤコブの後裔イスラエル族とは不倶戴天的な関係である。イスラエルはその不信のため神の審判を受けて一度び国が亡びた。エドムも審判を受けねばならないことはその他の諸民族と同様である。現代の諸国家も夫々、神の審判を受けるべきものをもっている。日本とドイツは第二次大戦で、その高慢な権力者ども、とりわけ軍閥の故に神の審判に遭い、ソ連やアメリカに無条件降伏をした。しかしそれは神の前の無条件降伏である^{と自覚すべきであった}。この自覚があれば、今日の日本とは別な復興の仕方をしたはずである。ソ連もアメリカも神の審判を受ける日が来るだろう。そのときは世界はどうなるか。日本もその余波を受けてどうなるか。酒槽^{きかぶね}を踏むと葡萄汁で衣は緋に染まる。キリストの酒槽は十字架であった。彼の衣は彼自身の血で染った。万人の審判たる神の義憤を自らにひき受けた贖罪の血であった。

8月25日

神の底ぬけの愛

(イザヤ63:8, 9)

彼^ハ宣^{のたま}えり「^げ実に彼らはわが民、虚偽^{いつわり}の無い子らである」と。かくて彼は彼らのため救主となった。

彼は彼らの艱難^{なやみ}のときは自らもなやみ、彼自ら天使の相^{すがた}となって彼らを助け、愛と憐れ^{あわれ}みとを以て彼らを贖^{あがな}い、はるか昔から日に日を貫いて彼らを拾^{ひろ}ひ彼らを荷^{にな}い給うた。

(イザヤ六三・八、九)

神エホバはイスラエル民族を特に「わが民」としてゐるわけだが彼らが「虚偽の無い子ら」であるという点を悦んでおられるようだ。心が神に、人に、天に、地に「いつわりがない」ということは人間として最も大切な一点である。あるがままのおのれということとは、自分自身に対していつわりがないという焦点をもっていることである。まちがえたらまちがえた、悪かったら悪かった、と正直に告白する心である。そういう魂は必ず救はれる。

第九節に語られている神の愛は何と底ぬけの愛ではないか。神と民との関係がこのような相^{あひ}であるとは。イスラエル民族は何といつても恵まれた宗教的民族である。人間味の深い、人格的な神、底ぬけの愛の神、そして六三・一一六に見たような徹底的な義の神、そして六三・一〇―一四に見るような霊の神を有つイスラエル民族は、やがて全世界の救主イエス・キリストの出現を見る民族であるわけだ。だがそのキリストに彼らは預^{あづか}りた。そのキリストを救主としない大きな預^{あづか}りを悟るときが歴史の終末となるであろう。

8月26日

本当のしがみつきの信仰

(イザヤ63:10……64:1)

六三・一〇 然るに彼らは悖りて彼の聖き靈を悲しませたので、彼は翻ひるがえって彼らの仇あだとなり、自ら彼らに敵対し給うた。

かくてその民古昔いにしえのモーセの日を想い出でて言った。「彼らとその群の牧者とを海より導きあげし者〔今〕いづこ。彼らの中に聖き靈を授けし者は〔今〕いづこにあるや」と。

二五 あなたの熱意とあなたの大能の御業とは今いづこにあるか。あなたの腸はらわたの愛と憐憫あわれみを留保とどめ給はざれ。

神エホバよあなたはわれらの父、昔からあなたの名は「贖主あがないぬし」。

神よ、なぜ我らを汝なが道より迷い離れしめ、我らの心を頑固がたくにし、あなたを畏れざらしめ給うや。願ねがはくは歸り給へ、汝なが僕らの為、汝なが嗣業なる諸族のために。願ねがはくは天を裂ひきてて降臨し給へ！

(イザヤ六三・一〇、一一、一五、一六、一七)

旧約聖書の中に「聖き靈」という表現は滅多に出て来ないから注目。六三・一〇、一一は破れた民の歎きであると同時に預言者の呻き。「我らの父」にも注目。民の離叛そむきも頑固がたくも神に帰し、神の方からの帰来、降臨を願う信仰の図太ずたさ深さ！これが本当のしがつき！

8月27日

思いがけない神

(イザヤ64:2-65:1)

六四・四(三)
昔から聞かず、耳にせず、眼に見たこともなかった、あなたを措いて如何なる神が、待ち望む者にかかることをなしたかを。
我を尋ねなかつた者に我は巡り遭い、我を求めなかつた者に我は見出だされた。我は我が名を呼ばない民に、「我は此処だ、我は此処だ、」と言った。

(イザヤ六四・四〔原文三〕、六五・一)

右掲の二句はまことにふしぎな聖言である。六四・四はイスラエルの民に自らを言と行為で啓示し給うた神エホバ(ヤハウェー)を一言で告白しているような句である。しかもその神を父と呼んで信頼したイエス・キリスト自身が人類の史上、未聞、未見、未曾有の、そして空前絶後の存在として出現したから、この句はその預言にもなっている。

六五・一は、イスラエル民族にとっては異邦である全世界の諸民にとつての不思議な預言ともなっている。大イザヤ書の終りに近きところにこの二句あるはまことに靈しき攝理、聖書は正に神に書かしめられている書である。

筆者自身の体験からも、正にこの二句の通りで、私は聖書という神のドラマの中に入つて身読していると、ただ驚嘆驚倒させられるばかりだ。旧制中学校生時代に、東京の小石川同心町の借家の二階の同室でキリスト者に化した舎兄政美と五年間暮していたとき、私は耶蘇教(基督教)信者になろうとは夢思っていなかったが、この兄政美の生きざまが隠れた要因となり、彼の北京での召天以来俄然、キリストに思いがけずつかまえられた!

8月28日

栄光の乳房

(イザヤ65:17, 19, 20; 66:10, 11)

然^{六五・一七}り、見よ、我は新天地を創造する。
 先のものは想い出されず、心にも昇^{のぼ}らない。
 我はエルサレムを欣び、わが民を楽しむ。
 最早その中に悲歎^{のう}の声も、悲痛の叫^{さけび}もない。
 日足らずして死ぬる嬰兒^{みどりご}も、
 生命^{いのち}の日満たざる老人もその中に無い。
 然り、百歳で死ぬる者もなお若しとせられ、
 百歳で死ぬる者は詛^{のろ}はれた罪人^{つみびと}とされる。
 エルサレムと偕に喜べ、彼女の故に歡呼せよ、
 彼女を愛するすべての者よ！
 彼女と偕に大いに歡喜せよ、
 彼女のために悲しみしすべての人よ！
 彼女の乳を吸い、その慰めの乳房に飽き足り、
 その乳首を吸い、栄光の乳房によって
 蘇生せんがためなるぞ！

(イザヤ六五・一七、一九、二〇。六六・一〇、一一)

第三イザヤは神から突如「新天地」創造の聖声を聞いた。そのエルサレムは地上のエルサレムの窮極の相であると共に天界のエルサレムの投影である。
 神の創造の傑作女性、愛と歡喜の象徴たる女性にエルサレムは譬えられ、女性美と生命の泉たる乳房が栄光と恩恵の徴と謳はれている。さて母という漢字は乳房の象形文字、その乳房の泉たる母乳は乳児の生命の水、水は聖靈に譬えられる。然らば乳房は聖靈の愛の相ではないか。乳房の秘義ここに極まる哉！

8月28日

(時) 第三イザヤの預言 (イザヤ56-66)

—永遠の乳房— 作詞：1981.8.10

歌詞：S. 537「わが主のみ前に」

永遠の乳房

キリスト我らを喜び給ふぞ

1 み霊の主イエスに深く祈り入る

悲しみにかえて 歓喜の油

憂いの心に 讃美の衣を

与えてやまざる われらの義の主よ

5 第三イザヤの 新たに示せる

聖霊のおとづれ 断じて忘るな

口に置かれたる み神の言霊

言は霊なり 永遠の生命なり

2 願はくは汝 み空を裂きてぞ

天降りし給ひて 汝が義のみ霊を

霞と降らしめ 枯葉にも似たる

われらの空しき 義を吹き飛ばせよ

6 主イエスのみ霊は わが衷に來たり

われらは福音を 語らざるを得ず

たましひを救り 心の呻きを

からだの痛手を 鎮めしめ給ふ

3 日本の国の 義朝日の如く

大和民族の 救松火と

燃え輝くまで われらはみ霊の

炎をともして 休むことあらじ

7 われは独りにて 酒槽を踏めり

主キリストのみは 我を知り給ふ

主の義のゆえにぞ 憤りたれど

救贖の故に 黙して荷へり

4 われらキリストを 大いに喜び

われらの魂 主をたのしみとす

新郎が新婦を よろこぶが如く

8 「いつはりなき子ら 汝らわが民!

われに祈り入れ われに帰り入れ!

わが愛の腕 抱きて荷はん

8月28日

(詩) 第三イザヤの預言 (イザヤ56-66)

—永遠の乳房— 作詞：1981.8.10

歌詞：S. 537 「わが主のみ前に」

9

み霊の力は 汝れらに溢れん」

天なるみ国の 幻の中に

第三イザヤの 見たるは何ぞや

み霊に満ちたる 永遠の乳房

父なるみ神の 恵みの徴ぞ

10

汝は我らの 哀なるみ神よ

我らは汝の 哀なるみ民よ

天地を新たに 創造り給ふ主よ

百年生くるも 永遠の一日

11

イザヤの預言は ひびきて新たに

ヨハネの黙示に 希望の花をば

咲かせて果てなき み国を現じて

み民に讚美の ハレルヤ挙げしむ

8月29日

神靈の力は火をも制する
(ダニエル 3)

「今^{三・二五}私が見ていると四人の者が縄目が解^とけて火の中を歩み、だれも何の害をも受けず、またその第四の者の容貌^{すがた}は神の子のようだ。」

ネブカデネザルはそこでその火の燃えている炉の口に進みよって呼んで言う「至高^{いとたかきもの}者の僕シャデラク、メシヤク、アベデネゴよ、お前^{みづか}ち出て来よ!」と。……

この人々の身体^{からだ}は火もこれを害する力がなかった。またその頭髮は焼けず、その衣裳はそこねず、火の臭^{におい}もこれにつかなかった。

(ダニエル三・二五—二七)

ダニエル書はヘブライ語原典では「諸書」の中にあつて、これは本来の預言書ではなく黙示文学書である。ダニエルはエゼキエル一四・一四にノア、ダニエル、ヨブという義人として挙げられている伝説的人物である。伝説であるから実在しなかったというのではない。本書の内容を見るとその歴史的背景はシリア王アンテオクス第四世エピファネス(紀前一七五—一六四)時代で、彼のユダヤ教に対する宗教的迫害は烈しかった。これに対して神のみ力と智慧によって信仰の戦をした勇士のユダス・マカベウスの象徴としてのダニエルの名である。ダニエルの伝説とエピファネスの事実と歴史の終末的黙示とが文学的構造で編み成されている。

右掲の三者はダニエルの同僚たる信仰の勇士で、天使が現はれて彼らを火の中で獲った。

8月30日

メネ・メネ・テケル・ウパルシン
(ダニエル5)

二五
ここに書かれた文字は、「メネ、メネ、テケル、ウパルシン」

三六
この言の解明はこうである、「メネ」(数えられた)は神が汝の治世を数えてこれをその終りに至らせたことを謂うのである。

三七
「テケル」(秤られた)は汝が權衡に秤られて、汝の重みの足りないことの現はれたことを謂う。

三八
「ウ・パルシン」(そして分たれた)は汝の国が分たれてメディアとペルシヤに与えられることを謂う

(ダニエル五・二五―二八)

ダニエル書第五章の記事の中の出来ごとであるが、時期はバビロニア王国の末期で最後の王ナボニダス(紀前五五―五三九)の子ベルシャザルが執政(「ベルシャザル王」ではない)をしていたときのことである。彼は諸侯、側近等千人を参集させて酒宴を設けた。先王ネブカデネザルがエルサレムの宮殿から奪取した金銀の器を用いて妻妾らも交えて歡樂の饗宴(たけなわ)の折しも、あやしげな人の手が幻の如く現れて白亜の壁にふしぎな文字が記された。ベルシャザルは即ち法術士、卜筮師(うらなひ)らにその文字の解明を求めたが誰もできなかった。時に太后が「聖き神の靈の宿れる人」ダニエル(ベルテシャザル)あることを異けたので彼を呼んだ。ダニエルは忌憚なくネブカデネザル及びベルシャザルの高慢を責めた揚句、この文字を右掲の如く解明した。神に叛く不信不義の徒も社会も国家も世界もその運命はメネ・メネ・テケル・ウパルシンである。審判を受ける。

8月31日

カタストローフ
大破局と星の人
(ダニエル6:12)

○^{六・三二}ダニエル王に言う「王、生命永かれ。

わが神そのみ使を遣って獅子の口を閉ぢさせ給うたので獅子は私を害しませんでした。私が辜なきこと彼のみに明かです。

(ダニエル六・二一、二二)

○^{三・一}その時^な汝が民の子らの為に立つ大なる君ミカエル起き上る。これ艱難^{なやみ}の時期である。国あってこの方この時期に至るまで、このような艱難のあったことはないだろう。その時汝が民は救はれよう。即ち書に録された者はみな救はれる。

(マタイ二四、マルコ一三参照)

霊知者は空の光輝^{かがやき}(太陽)の如く耀^{かが}よう。また多くの人を導いて義に到らしめた者は星の如くなって永遠に至る。

(ダニエル二・一、三)

○ダニエルはバビロンの某王(「ダリヨス」ではない)に起用されたが重臣どもの隠謀に遭い、あらぬ勅令のため獅子の穴に投げ入れられた(六・一六)。ところが祈り深いダニエルは神に護られて獅子が咬みつかなかった。隠謀者らは彼に獅子の穴に投げ入れられて咬み殺された。ひとを妬み呪う者はその呪を自らにかぶることになる。

○世界の終末時には大艱難、大破局(カタストローフ)が来ることはエレミヤもイザヤも預言している。そのとき誰も知らぬ天界の神の書に記されている人々は救はれる。そのとき人々を助けた輝く高次の聖霊の人人は太陽や星辰と輝いて神を讃美する。